
ある3人の恋物語

幸水 奏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある3人の恋物語

【Nコード】

N8282B

【作者名】

幸水 奏

【あらすじ】

『年上・同年・年下』あなたの好きな男性のタイプはこのうちどれですか？1人は年上のサラリーマンと…。1人は同じクラスの男子と…。1人は年下の幼なじみと…。3人の恋の物語です。1話ごとに主人公が変わります

登場人物

古林 華

- コバヤシ ハナ -

17歳の高2。

年上の詠と付き合っている。

好きなタイプは年上。

藤沢とは小学校からずっと一緒。

凜子と未散とは高校からの仲。

強がってしまつて、本音が言えない事が多い。

井上 凜子

- イノウエ リンコ -

17歳の高2。

同い年の稔の事で悩み中。

悩みを1人で抱えこんでしまう事がある。

藤沢と共に学級委員をやっている。

庄司 未散

- ショウジ ミチル -

17歳の高2。

幼なじみで年下の宏毅から想われている。

宏毅とは家が隣。

のんびりしておっとり系。

周りに流される事がよくある。

恋愛より友情を大事にしている。

間宮 詠

- マミヤ エイ -

27歳。

華の彼氏。

サラリーマンで結構忙しい。
車所持。

佐々 稔

- ササ ミノル -

17歳の高2。

クラスの盛り上げ担当。

カラオケが大好きで勉強が嫌い。

皆の人気者で結構モテる。

サッカー部。

篠田 宏毅

- シノダ ヒロキ -

15歳の高1。

幼なじみの未散の事が好き。

美形でかなりモテる。

未散達がいる、この高校には転校してきたばかり。

サッカー部。

藤沢 陵

- フジサワ リョウ -

17歳の高2。

皆の相談役。

稔と同じくらいモテているが、今恋愛はしていない。頭も良く、サッカーも上手い。サッカー部の部長。

第1話：年上のあなた

好きで、好きで、大好きで…だから、あなたの気持ちに不安にな
っちゃうの

あたし、古林 華の好きな男性のタイプは年上!!
付き合うなら絶対に年上って決めてた。
そんなあたしにできた、初めての彼氏・間宮 詠さんは、あたしよ
り10歳年上の27歳。

すごく優しくて、かつこよくて、とにかく大好き!!

でも…こんなに好きなのは、たぶんあたしだけ。
詠さんの気持ちを疑うわけじゃないんだけど、心配なんだ。
いつか…詠さんが離れていきそうで。

「ごめん、華…。明日なんだけど、急に仕事になっちゃうて。」
夜、詠さんからかかってきた電話。
用件は前から約束してたデートのキャンセル。

「会えないってこと？」
「うん…。本当ごめんな。」
「いいよ。全然、気にしない。お仕事がんばってね!!」
そう言っで一方向的に電話を切った。

あたしは、大人な詠さんに釣り合うように、聞き分けのいい女を演
じる。

本当は言いたいこともあった。

『この前だって仕事だったじゃん!!』

『もう3週間も会ってないよ!!』

聞きたいこともある。

『詠さんは、あたしに会いたいとか思わないの?』

『ねえ…あたしのこと、好き?』

本心なんて…言えないよ。

詠さんにワガママな子供とか思われたくない。

だから、これでいい。

本心を隠したまま、大人な女を演じれば。

「おはよ!!華。」

「おはよう、華ちゃん。」

「凜子…。未散…。おはよう…。」

次の日、あたしは暗い気分のまま学校に登校した。

声をかけてきたのは、クラスで仲の良い、井上凜子と庄司未散だった。

「なんか華、暗くない?」

「今日は間宮さんとデートなんでしょ?」

「デートなくなった。仕事だった。」

自分で言って更に暗くなった。

「じゃ、じゃあさっ!!気分直しに、カラオケ行こっ?クラスの皆で行くつぽいし。」

あたし達のクラスはすごく仲良しで、時々皆で集まって遊んでる。

「凜子も未散も行くの?」

「私は行くよ。凜ちゃんも行くでしょ?」

「行くよ。だからさー！華も行こー！」

「そうだね、行くー！」

もう詠さんのキャンセルなんて忘れて歌いまくってやるっ！！！

放課後

「皆さーんー！飲み物はお手元に行きましたか！？それでは、2年4組の不滅を誓って…かんぱーいっ！！」

「…かんぱーいっ！！」「…」

乾杯の音頭を取ったのは、クラスの盛り上げ担当で幹事を務める佐々稔。

佐々くんに続いて、クラスの皆がそれぞれ乾杯をしている。

佐々くんと仲の良い凜子は、訳の分からない乾杯の音頭に呆れぎみだ。

「それではまず最初に私、佐々稔が歌わせて頂きますー！凜子ー聞いててねえー！」

「はいはい…。」

音楽が流れ始めて、佐々くんが歌い始め、皆が盛り上がっている。

「佐々くんって凜子のこと大好きだよねえ。」

「なっ…」

「華ちゃんもそう思う？私は佐々くんと凜ちゃんは付き合ってるのかと思つてたよー。」

「何言つてんのー！？そんな訳ないじゃんー！」

私と未散が言つたことに凜子は顔を真っ赤にしてうつ向いた。

「りーんこっ！ー！あ、古林さんも庄司さんもどうだった！？俺の歌ー！」

歌い終わって戻ってきた佐々くんが凜子の元に来て、楽しそうに話している。

私も… 同い年と付き合ってたなら、こんな風に笑ってるのかな。演じた自分じゃなく、素の自分で相手に向き合えるのかな…。

さつきから、何回開いたかわからない携帯を見る。

メールも電話も来てない。

溜め息をついて、携帯を鞆に閉まった。

それから皆で騒ぎ続け、11時過ぎに解散となった。

「危ないから、女子は家の近い男子に送ってもらってねー!! あ、凜子は俺が送るから!」

佐々くんがそう言っていると、クラスの皆に爆笑が起きた。

… 凜子、恥ずかしそう。

「古林、送るよ。」

「藤沢…。」

この男、藤沢陵はあたしと家が近くて小・中・高と同じ。

物静かだけど、クラスの皆の事をよく見ていて、人が悩んでいるとすぐに気付く。

そんな男… だとあたしは思う。

「古林… 今日ため息ばっかついてたけど、つまんなかった?」

「そんなことないよっ!!… ただ、ちょっと悩んでてさ。」

「年上の彼氏の事? 俺で良ければ聞くけど?」

「いいの? あのね…。」

あたしは、藤沢に自分の悩みを話し始めた。

自分を隠して、聞き分けのいい女を演じていること。

詠さんの本当の気持ちかわからないこと。

その他全ての悩みを吐き出した頃、あたしの家に着いた。

「ありがとう、藤沢。いろいろ聞いてもらってスッキリしたよ。」

「古林、俺からのアドバイス。不安かもしれないけど、彼氏に本音でぶつかってみるよ。そうしないと彼氏だって本当の事言うわけないって。それに、お前が不安ってことは彼氏だってお前の気持ちわかってなくて不安なんじゃん？お前は年下なんだから、少しくらい甘えたってわがままなんて思わねーよ。」

「そうかなあ？わがまままでウザいとか思われたい？」

「少しくらい大丈夫だって！！がんばれよ。じゃあ、また明日な。」

「あ、うん。送ってくれてありがとう。」

藤沢…いい人だな。

本音でぶつかる…か。

くくく

電話だ。

誰だろ？

詠さんっ!？

「もしもしっ!？どうしたの!?仕事は!？」

「仕事は終わったよ。今、華の家の近くの公園にいるんだけど…」

「行くっ!?!ちよっと待ってて!?!」

あたしは電話を切つて、来た道を戻り公園に行った。

もう自分を偽らない。

嫌われてもいいから、あたしの本当の気持ちを詠さんにぶつける！！

「華！」

詠さんは公園の入口に車を止め、車の横に立っていた。

「いきなり電話切るなよー。迎えに行くって言おうとしたのに。」

「ごめんねっ。あの…あたし、詠さんに話があつて…」

あたしがそう言うと、詠さんの顔が強ばった。

「詠さん…？」

「…何の話？」

がんばれ、あたし。

「あのね…あたし、いつも強がってたけど、それは本当の自分じゃない。本当は、詠さんに会いたくて会いたくてしょうがないの。仕事なんて行かないでほしい。ずっと一緒にいたい。それから…あたし、詠さんの気持ちがわからなくて…不安なの。」

そこまで言うと、あたしは詠さんに抱きしめられた。

「恥ずかしいから、顔見るなよ。」

そう言つて詠さんが話し始めた。

「不安だったのは、俺も同じ。華は会いたいとか全然言わないから、会いたいのは俺だけなのかなとか思つてた。」

そう…だったんだ。

詠さんも不安だったんだ。

あたしに会いたいわって思ってくれてたんだ。

「詠さん…あたしのこと、好き？」

「好きに決まってるんだろ。華は？」

「大好きっ！！」

やっぱり、本音を言う事は大事なんだね。

藤沢…。藤沢の言ったとおりだったよ。

「でもよかった。華が話があるって言うから、俺フラレるんだと思
った。」

「えっ！？」

あたしは驚いて、上を向いて詠さんの顔を見た。

そこには真っ赤な詠さんと、満天の星空。

「この公園に着いたとき、車の中から華と男が親密そうに話してる
のが見えて…。華の気持ちがあいつに行っちゃったのかと思った。」

「藤沢はただの友達だよ。」

「よかった。華の好きなタイプは年上って知ってたし、大人な性格
が好きって言うってたから、隠してたけど…俺、本当は嫉妬深くて独
占欲強いから。」

「そうなの？」

「だって俺、華が学校行くのも嫌だって思ってる。あんなたくさん
男がいる所なんて行かせたくない。」

なんだか詠さんがかわいく思えて、あたしは笑ってしまった。

「…キライになった？」

「ううん！！もくくと大好きになった！！」
あたし達は顔を見合わせて笑った。

そして、星空の下でキスをした。

古林華、17歳。

偽りの自分を捨てて、本音をぶつけた。

そしてわかった、あなたの愛。

あらためて、幸せと喜びを感じた。

今日のこの時を忘れずに、あたしはこれからも歩いて行く。あなた
と一緒に…

〈 第1話 End 〉

第2話：同級生のあいっ

あんたは私をどう思ってるの？からかってるだけ？

「凜子っ！！おはよっ！！」

私、井上凜子の最近の悩みはこいつ、佐々稔。

「稔〜！！名前で呼ばないでっっていつも言ってるじゃん〜！！」
私のこと、何とも思っでなくせに…。

名前で呼んだりなんかして、期待させないでよ。

「凜子は凜子だろ？それにお前だっで俺のこと名前で呼ぶじゃん。それは…多数の女子があんたのこと、名前で呼んでるからじゃん。あたしのこと名前で呼ぶ男子はあんただけなんだよ。」

「いいじゃん〜。毎日一緒に学校行ってる仲間なんだし」

そう言っで稔は自転車から降り、私の隣を歩きだした。

「勝手にあんたがついて来てるだけじゃん。」

「うわっ！！つめたいねえ。」

なんで私にかまうの？

好きじゃないくせに。

ほっとしてよ、あんたが隣にいるだけで苦しいの。

「お前ら…ホントに仲良いな。毎日一緒に登校して。」

後ろから声をかけてきたのは、同じクラスの藤沢陵。

「おはよー、陵。俺と凜子のラブラブ登校を邪魔しないでくれよ。」

「なっ…バカじゃないの！？私、先行くから！！」

私は走っで学校へ向かった。

もうっ！！本当になんなの？
稔が考えてる事、わかんない…。

学校が近くなつた所で私は走るのをやめた。

あれ…？未散？

ふと前を見ると同じクラスで仲の良い庄司未散が男子と一緒にいた。

未散、いつの間に彼氏できたのかな？

あ、車から守ってもらってる！！

いいな…未散。

私はさりげなく、未散の横を通り過ぎた。

「凜ちゃんっ！！待って！！」

私に気付いた未散が私に抱きついてきた。

「未散…彼氏と一緒に行かなくていいの？」

「彼氏じゃない。ただの幼なじみだもん。」

あ、そうなんだ。

でも幼なじみくん、悲しそうだけど…。

「あ、華ちゃんだ。」

前には暗い表情の華が歩いていた。

古林華も同じクラスで仲が良い。

「おはよ…！！華。」

「おはよう、華ちゃん。」

「凜子…。未散…。おはよう…。」

暗っ！！顔も泣きすぎでヤバくなってる！！

華は今日のデートを年上の彼氏にキャンセルされたらしい。

かわいそうに…。
華、前から楽しみにしてたのに。

私は気分転換になると思い、今日の放課後の稔主催のクラス会に華カラオケも誘った。

放課後

「皆さん！飲み物はお手元に行きましたか！？それでは、2年4組の不滅を誓って…かんぱーいっ…！」

「…かんぱーい」「…」
こうしてクラス会は始まった。

稔って、ホントに盛り上げるの上手いなあ。
だからきつと、女子にモテるんだろうなあ。

「それではまず最初に私、佐々稔が歌わせて頂きます…！凜子」
聞いてねえ…！」

「はいはい…。」
もうやめてよ。
期待させないで。

「佐々くんって凜子のこと大好きだよねえ。」

「なっ…。」

「華ちゃんもそう思う？私は佐々くんと凜ちゃんは付き合ってるのかと思っただよー。」

「何言ってるの！？そんな訳ないじゃん…！」

稔が私を好きって言うのはありえない。

だって私は前に1回、稔にフラれてるんだもん…。

「りくんっ！！あ、古林さんも庄司さんもどうだった！？俺の歌！」
歌い終わって私達に寄ってきた稔に、私は無理矢理笑顔を作り、楽しそうなフリをしながらたくさん話をした。

11時過ぎに解散となり、私達は店から出た。

「危ないから、女子は家の近い男子に送ってもらってねー！！あ、凜子は俺が送るから！」
そう稔が言くと、クラスの皆が盛り上がる。
私は黙って下を向いた。
なんか、イライラする。

それから家までの道を私は何も喋らず、稔も黙ったままだった。

しばらくして、私の家の前に着いた。

「稔。」

「何？」

「…もう私を使って皆を盛り上げるのやめてよ。稔は私のこと、昔フツた都合の良い女って思ってるんだろうけど、私はもう嫌なの！もうかわらないで！！稔なんか、大っ嫌い！！」

そう言い残し私は家の中に入っていった。

稔、ビツクリしてた…。

大嫌いは言いすぎたかな…。

もう前みたいに話す事はないんだ。

あんなこと言わなきゃ良かったかな。

でも辛いんだもん。
これでいいんだよね。

次の日、私はいつもより早く家を出て学校に向かった。
登校している生徒は少なく、もちろん稔にも会わなかった。

稔は遅刻ギリギリの時間に教室に入ってきて、目が合ったけど、私はすぐに反らした。

「井上。」

昼休み、廊下を歩いていた私は藤沢に呼び止められた。

「お前ら、ケンカでもしたの？喋ってないけど。」

「別に…。」

「本当にお前ら、不器用！！井上は稔が好きなんだろう？」

「好きじゃないってば！！」

「嘘つくくなって。俺が協力してやるから。」

「…は？」

「今からお前は俺の事を名前で呼べ。俺もお前の事を名前で呼ぶから。」

「ちよつと！！意味わかんないんだけど！！」

「いいから。あいつはお子様だからな。これで上手くいくって！！」

「じゃーな凜子。」

「ちよつと藤沢！！」

「陵だつて。」

「なんでこんなことに…。」

私を名前で呼ぶ男子は稔だけだったのに。

次の日も私は家を早く出た。

「凜子。」

前には稔がいた。

「昨日の朝、凜子が来なかったから、今日は早く来てみたんだけど……」

私は稔の言葉を無視して通り過ぎた。

「おいっ！！凜子！待てよ！！」

私は稔に腕を掴まれた。

「離してっ！！」

「稔！！凜子！！」

藤沢っ！！

「え……。陵、今凜子って……」

「陵、行こっ！！」

私は稔の手を振り払い、藤沢の腕を引っ張って学校へ向かって走りだした。

放課後、私と藤沢は担任に仕事を頼まれ、2人で教室に残っていた。

「井上、ちゃんと上手くいくって。だから心配すんなよ。」

「でも今日1日、学校で目も合ってる気ないよ。」

なんか…悪い方に進んでいってる気がする。

「私さ、高校に入った時くらいに稔にフラれてるんだ…。だから…」

無理だよと続けようとしたけど、涙が溢れてきて言えなかった。

「井上……」

ガラッ

急にドアが開き、稔が入ってきた。

「悪い、陵。ちよっとこいつ借りる。」

「どーぞ。」

「ちよ、ちよっと！！」

私は稔に手を引かれて、屋上に連れていかれた。

「何！？もつかかわらないでって言ったじゃん！！」

「凜子…。陵と付き合ってるのか？」

稔、いつもと違う…。

ちよつと怖い。

「この前…俺が凜子の事、都合の良い女って思ってるって言ったけど、本当にそう思うか！？」

私は黙ったまま下を向いていた。

「なあ、凜子。俺が女子で名前呼ぶのお前だけって気づいてる？」

え…？

たしかに、華の事も未散の事も名字で呼んでるかも。

「俺が、ああやって皆の前で凜子の名前を出すのは、盛り上げるためじゃなくて、他の男子が凜子の事を好きにならないようにだから。」

私は稔を見た。

「まだ気づかない？俺は、凜子が好きなんだけど。」

稔が…私を好き！？

「前に凜子が告白してくれた時は、凜子の事よく知らなかったからさ。でも同じクラスになって、凜子の事知っていくうちに好きになった。凜子が陵の事好きでも、俺は凜子が好き。」

その言葉、信じていいんだよね。

っていうか、稔誤解してる。

「藤沢の事は好きじゃないよ。私も…稔が好き。」

そう言つと、私は稔に抱きしめられた。

「…本当に？」

「うん。」

「もう1回好きって言って。」

「嫌だよ。恥ずかしい。」

「この前凜子に大嫌いって言われて、すげーショックだった。」

「ごめんね。」

「俺、不器用だからさ。凜子にフラれるの怖くて、なかなか告白できなかつたんだ。でも…もっと早く言っていればよかった。」

稔：そんな事、思ってたんだ。

「あ、それから！！陵の事、名前で呼ばないで。あと陵から名前で呼ばれないで。」

「…やきもちやき。」

「うるせっ！！！」

井上凜子、17歳。

私達の恋は不器用すぎて、たくさん遠回りしたけど、辿り着いた先には、たくさんの幸せが溢れていたの

〜第2話 End〜

第3話：年下の君

昔と違う君に、私の心は戸惑いで壊れてしまいそう

「あ、未散。隣の家の篠田さん、近い内に戻って来るんですって。」
…篠田さん？

お母さんの言葉に私は昔の記憶を探った。

「それでね、宏毅くんが未散と同じ学校に通うらしいから、仲良くするのよ。」

「はい。」

そうだった！！

篠田さんって、ヒロくんだ！！

たしか…私が7歳の時に引越しちゃったんだよね。

それまでは、人見知りで弱虫のヒロくんの事を私が守ってあげてたんだ。

そっかあ。

戻ってくるのかあ…10年ぶりくらい？

ちよっと楽しみかも！！

…1週間後…

「いつてきまーす！！！」

私はいつもどおり、元気に家を出た。

今日もいい天気だ。

「未散？」

後ろから声をかけられて、振り向くと美形の男がうちの学校の制服を着て立っていた。

気のせいかな？

私にこんな美形の知り合いいないし。

私は再び歩きだした。

「未散！！未散だろ！！？」

「…どちら様ですか？」

「俺だよ、篠田宏毅。」

「えっ！？ヒロくん！？？」

あのヒロくん！？

あの泣き虫でいつも私の後ろに隠れてたヒロくん！？

「よかった、未散に会えて。俺、ずっと未散に会いたかったんだ。」

ヒロくんはそう言っていると私の頭にキスをした。

「…え？」

何！？今の！？

「驚いた？でも俺、未散の事好きだからさ。違う所に住んでも、未散の事が忘れられなかった。」

「何言ってるの！？ヒロくんは年下でしょ！！！」

「年下が年上を好きになっちゃういけないの？」

「違うけど…私は年上が好きなの！！！」

そう言っただけで大人な雰囲気、笑みを見せてみる。

その途端、ヒロくんが私の腰を引き、顔を近づけてきた。

「ふーん。ま、そんな事俺には関係ないけど？」

近いよ！！

キスされんのかと思った…。

「それに、こんな事だけで顔赤くなってるし？ま、とりあえず一緒に学校行こう？」「えー。やだよ。」

こんなのヒロくんじゃないよ。

昔の可愛かったヒロくんじゃない！！

「俺、学校までの道わかんないんだけどな…。」
「なんでこんな時だけ、昔のヒロくんの顔に戻るの？
反則だよ…。」

それから私達は他愛もない話をしながら学校へ向かった。

途中、車道側を歩いていたら私に車が迫ってきた。

「あぶねっ。」

そう言つて、ヒロくんは私を抱きよせた。

ドキッ！！

何？今の『ドキッ』は！？

「未散？大丈夫か？」

「大丈夫っ…。早く離してよー。」

このドキドキがヒロくんに伝わる前に。

きっと私の顔は真っ赤だと思う。

恥ずかしいよ…。

あれ？凜ちゃんだ。

「凜ちゃんっ！！待って！！」

私はヒロくんから離れ、凜ちゃんを追いかけた。

「未散…いいの？彼氏と一緒に行かなくて。」

「彼氏じゃない。ただの幼なじみだもん。」

そのまま私は凜ちゃんと一緒に学校へ行くことにした。

一瞬、ヒロくんが寂しそうな顔をしていた感じがしたけど…。

途中、年上の彼氏からデートをキャンセルされて元気がない華ちゃんも合流!!

そして放課後は、クラス会でカラオケだった。

でもその日の華ちゃんと凜ちゃんは、いつもと違っていた。

華ちゃんは相変わらず元気がなくて、凜ちゃんもあんなに仲の良い佐々くと無理して話してる感じで…。

私はヒロくんに対するドキドキがなんなのか、2人に聞きたかったけど、聞けなかった。

それに…この気持ちがあるのか、ホントは自分でも気づいているから。

それから1週間後。

1週間経ったけど、私とヒロくんの間に変化はなかった。

変わったのは、凜ちゃんが正式に佐々くと付き合い始めた事。

華ちゃんも彼氏さんと絶好調らしく、幸せそうだった。

「未散には藤沢みたいな人がいいと思うんだけど…どうかな？」

「華もそう思う？藤沢、良いやつだよ!!未散、藤沢は彼氏におすすめだよ!」

「えっ?な、なんで藤沢くん？」

「だって、未散だけ…」

華ちゃん…。

私は自分の恋愛より2人が幸せならそれで十分なんだけどな。

それに私はヒロくんが…。

「今日の帰りにサッカー部終わるの待って、藤沢と話そうよ。私も稔の部活終わるの待つし。一緒に待とうよ。」
「そっか…。」

藤沢くんも佐々くんもヒロくんもサッカー部なんだよね。

話すくらいならいいかな。

どうせ、藤沢くんだって私の事好きじゃないし。

そうして、私と凜ちゃんはサッカー部の練習を見ながら、終わるのを待った。

それにしても、藤沢くんもヒロくんもすごい人気だな。

佐々くんは凜ちゃんと付き合い始めたから、ちよっただけ人気落ちちゃったんだよね…。

「未散、練習終わったみたい。行こう!!」

凜ちゃんは真つ先に佐々くんの所に行ってしまった。2人を見てると自然に笑顔になってしまう。

「未散。」

「あ、ヒロくん。練習お疲れさま。」

「ずっと見てたの？俺どうだった？」

こついう事を聞いてくるヒロくんの笑顔は、昔と全然変わってない。無邪気で可愛げで…ドキドキする。

そこで突然聞こえてきた、女の声。

「ヒロオ〜。部活見てたよお。」

ヒロくんはその子と話し始めてしまった。

何？この子。

ヒロくんの彼女？

やだ…やめてよ。

他の女の子と話さないで。

他の女の子に笑わないで。

でも…ヒロくんの彼女でもなくせに、こんな事言う資格ない。
ヤバい…泣きそう。

私はその場にいたくなくて、走りだした。

「あ、藤沢くん。」

気付いたら、前にいた藤沢くんに話しかけていた。

「庄司？どうかした？」

「あかさ…一緒に帰らない？」

私、何言ってるの！？

「別にいいけど…俺部長だから最後まで残らなきゃいけないけど、ちよっと待っててもらわなくちゃいけないけど…。」

「あ、うん…待ってる。」

私…何やってるんだろう。

ヒロくん、今頃あの子と一緒に帰ってるのかな…。

しばらくして藤沢くんが来て、私の家の近くまで送ってくれた。

「送ってくれてありがとう。また明日ね。」

「あ、庄司。宏毅の事、しっかり見てあげて。宏毅はモテるけど、自分の恋は苦手らしいからさー！」

「え…?」

「じゃあな!!」

どういう事?

ヒロくんの好きな人ってさっきの…?

「未散!!」

私の家の前にはヒロくんが立っていた。

今は会いたくなかった。

会っても素直になれないし、冷たく接しちゃうと思うから。

そんな事を思っていると、私は腕を引っ張られて、ヒロくんの部屋に連れて来られた。

「未散： 陵先輩が好きなの?」

「なんで? ヒロくんには関係ないじゃん。」

私： なんでこんな言葉しか出てこないの!?

「陵先輩と付き合うの…?」

私はヒロくんのベッドに押し倒された。

「ちょっと!! やめてよ!!」

「どうしたら未散は俺の事見てくれんの?」

ヒロくんが私の首に口づけた。

やだ!! 怖い、怖いよ…。

私の前にいるのは誰？
本当にヒロくん？

「ふ…ふえ…こ、怖い…よ。…やだあ、怖…い。」
嫌だ…怖くて涙が止まらない。

ヒロくんはごめんと呟き、私の上からどいた。

「こんなのっ…ヒロくんじゃない！！私が知ってるヒロくんは、優しく、ちよつと頼りなくて弱いけど私を泣かせたりしなかった！！こんな怖い思いもさせなかった！！返してよ！！昔のヒロくん返して！！昔のヒロくんの方がよかった！！！！」

私は思いつきり叫んでいた。

こんな事言いたくないのに…。
こんな事言ったら、嫌われちゃうよ…。

「…っなんだよ、それ！！昔の俺がよかった？ふざけんなっ！！昔の俺なんて、いつもお前の後ろに隠れてた情けない奴じゃねーか！！…もういい。帰ってくれ…帰れっ！！」

私は泣きながら、自分の家まで帰った。

部屋に入っても涙が止まらない。
怖かった…。

ヒロくんが怖かった。
でもそれ以上に、ヒロくに嫌われた事が苦しかった。

ヒロくん…。
ヒロくん…。

ごめんね、嫌われちゃったけど、大好き。

次の日になって、私はいつもどおり学校へ行く準備をした。いつも

と違うのはヒロくんと一緒に学校に行けない事。

「いってきます…。」
家を出ると、ヒロくんが立っていた。
表情はいつもと違うけど。

「未散…昨日は怖い思いさせてごめん。俺、未散の事が好きだけど諦める。もう泣かせたくないから。少しずつ、好きじゃなくなるように努力する。もう会っても話しかけない。だから、未散も俺の事シカトして。じゃ、そういう事だから。未散、幸せになつてよ。」

え…？待ってよ、まだ私の気持ち伝えてない！！

私はヒロくんを追いかけて、後ろから引つ張った。

「やだ！！やだよ！！そんな事言わないでよ！！私、昔のヒロくんの方がいいって言ったけど、昔のヒロくんにはドキドキしなかった。でも、今のヒロくんにはすごくドキドキするの。これって、今のヒロくんが好きって事なんだよ。だからお願い。離れたくないよ…。」

そこまで言うと、ヒロくんは私を見て、抱きしめてくれた。

「俺の方がいっぱい好きだよ。」

そう言って笑う、ヒロくんは昔と変わらない、私の大好きな笑顔だった。

庄司未散、17歳。

戸惑いがドキドキに変わって、それが恋って事に気付いた。昔の君

も今の君も、ずっと大好き

〈 第3話 E n d 〉

あとがき

こんにちは。幸水奏です。

最後まで読んでくださった皆様、ありがとうございました！！

文才がないので、読みづらい箇所が多々あったと思います。

3話連載で、毎回主人公が違ったのですが…

なんだか、男3人のキャラがかぶっているような感じが（<|>）
特に詠と稔が…

ちなみに私のタイプは年上ですv vでも、詠は微妙です（笑）

この3人だったら、宏毅かな？

ちなみに、藤沢にも相手を作ろうと思ったのですが、作りませんでした（笑）

一番書いてて楽しかったのは、未散と宏毅です。

一番長くなっちゃったけど…

私は年下との恋は嫌なんですけど、一生懸命な男の子は可愛いいですよね。

宏毅が住んでいた場所は、アメリカかって事にしてあります。

本当は、華と詠の出会いもあります！！

一応設定は、友達の紹介つと事にしてました。

華の友達のお兄ちゃんの友達みたいな感じですが！
だから詠は、その友達兄弟を通して、華のタイプが年上っていうのを知ってるんです！！

凜子と稔は、高校2年で同じクラスの隣の席になって仲良くなりました！

稔はクラスで『凜子〜凜子〜』言っていました（笑）
本当は凜子と同じで不安だったんです。

そして稔は一応モテる設定なのですが、他の女子は可哀想ですよね〜。
でも、凜子が妬まれないのは凜子が女に人気だからです！！

それでは言い訳が長くなりましたが（笑）

ここまで読んでくださり、ありがとうございました！！

これからも、ぜひよろしくお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8282b/>

ある3人の恋物語

2010年10月11日12時14分発行